

教師や看護師にとって「共感」は必要なのか？

著者	永島 聡
雑誌名	神戸常盤大学紀要. 別冊
号	12
ページ	13-13
発行年	2018-10-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1492/00000996/

3-O-2

教師や看護師にとって「共感」は必要なのか？

永島 聡¹⁾

心理的支援の場面において、共感は援助的なものであり、支援者は当事者に対して共感的に接することが当然であり、それに疑問の余地はなかった。はたして本当にそうなのか。

心理学者 Rogers にとっての共感とは、支援者が当事者の立場に身を置き、あくまでも当事者が感じているものをそのまま支援者も感じることであり、これは当事者のパーソナリティが建設的な方向へと成長する一つの条件となっている。これは学派を超えて望ましい概念として多くの心理療法の基盤に現在も通底している。

一方で心理学者 Bloom にとって、共感特に「情緒的共感 (emotional empathy)」は有益なものではない。これに関する多くの研究のメタ分析を通じて、心理的支援の場面で支援者が共感的になった場合、状況を適切に把握できなくなり、支援者がただ疲弊してしまう場合があり、共感とは援助的に働くものではないことを述べている。さらには大きく社会的に、共感とは道徳の基盤にはならないとも断言する。

両者の違いを比較検討すると次のようなことが言える。すなわち、これまでのように無批判に共感を肯定するのではなく、Bloom の言うところの「認知的共感 (cognitive empathy)」や「思いやり (compassion)」を重視しつつ共感に対して慎重になることが、援助的になり得る、ということである。

1) 保健科学部看護学科